広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺書写本の朱点について：親鸞自筆加点本および龍谷大学蔵南北朝期加点本との比較
Author(s)	佐々木，勇
Citation	訓点語と訓点資料 , 126 : 34 - 48
Issue Date	2011-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00031278
Right	Copyright (c) 2011 Author
Relation	

西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺書写本の朱点について

―親鸞自筆加点本および龍谷大学蔵南北朝期加点本との比較―

佐々木　勇

○、本稿の目的
一、西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺書写本の朱点
二、正平六年写本朱点と親鸞加点本朱点との比較
三、正平六年写本朱点と龍谷大学本南北朝期朱点との比較
四、正平本・龍谷大学本『無量壽經』と親鸞加点本
五、結び

○、本稿の目的

本稿は、西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年（一三五一）存覺書写本朱点ならびに龍谷大学蔵『無量壽經』（021-129-2）南北朝期朱点の、仮名音注・声点・句切り点が、親鸞自筆の訓点をほぼ正確に伝えることの論証を目的とする。

一、西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺書写本の朱点

浄土真宗本願寺派本願寺（西本願寺）に、存覺（一二九〇年―一三七三年）が正平六年（一三五一）に書写した『淨土三部經』が伝えられている。この写本の存在は、『古写古版真宗聖教現存目録』（一九三七年、本願寺宗学院）などで、早くから知られており、本稿の筆者も、閲覧の機会が得られることを願っていた。

この度、教学伝道研究センターのご厚意により、二〇〇九年秋から数度に亘って、この、西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年写本のカラー写真を拝見する機会に恵まれた。[1]

そこで、本稿では、まず、この存覺書写『淨土三部經』正平六年点の概要について報告する。[2]

以下、本訓点本を、正平本『淨土三部經』、あるいは、単に正平本と呼ぶ。

正平本『淨土三部經』には、次の奥書が存する。（／は原本の改行、（　）内は、割書されていることを示す。）

[観無量壽經]

正平六歳(一三五一)辛卯十一月七ヶ日御報恩念佛中参籠／
本願寺之間以上人御自筆本差聲切句畢日來／所奉寫持之本
先年於關東紛失之間今楚忽／奉寫之後日以此本可奉書寫安

置者也／於上下堺之上下并行間雖被記疏文略之　釋存覺
（以上、朱筆。）

［阿弥陀經］

正平六歳辛卯十一月二十八日於大谷御廟以御自筆寫聲并句畢御本所被披觀經也稱讃／浄土經文并法事讃元照律師釋等雖被載之今所略也　釋　存覺
（以上、朱筆。）

［無量壽經　巻上］

正平六歳辛卯十二月十五日切句差声畢朱點是也本者／御室戸大進入道殿〈有範／上人御親父〉御中陰之時兼有律師被加／點之由往年承置之間所寫之也外題者上人御筆也少々／不慮之事等雖有之併任本畢先卒爾寫之後日加／料簡可點他本者也　存覺
（以上、墨筆。）

［無量壽經　巻下］

貞和二歳（一三四六）丙戌六月十一日以一念形木摺本／書之〈但爲早速用草字之／間不守點畫〉則寫彼流點畢／
折臂老法印光玄〈五十／七〉
彼本奥書云
御本云
嘉禎二年（一二三六）丙申十二月廿八日以真如寺殿御本／移點了　性／　同三年丁酉三月廿七日以肥州本校點了　性／
同廿八日以同本切句竟云々
又云
文永二年（一二六五）乙丑七月五日於法蔵寺御房以御本／〈即八條聖人／御本也〉點校等竟
文永十二年（一二七五）乙亥四月十五日以顕御本移點竟
同廿九日校合了
已上本奥書也
彼本願成就文以下處々科文等并私付一流之義／令記付事等済々焉今併略之只文點等廣有／欲見合之思仍寫之而已又件本或以義寂／憬興等之尺勘入之或以玉篇廣韻等改字義等／今同略之件勘文故昌暹法眼筆跡也／然者声假名等合點以故尊真上人之説／允用歟件上人之説當初即雖相傳之／愚本紛失之間老昧之後忘却多端仍／就見及寫之當巻委點大切之故相勵／損手不便丶丶左道丶丶
貞和四歳（一三四八）戊子十月五日以興國寺本見合加點畢所／載左之點是也　（存覺花押）
件本奥書云
於西山参鉆寺以本御坊上人善一御自筆之御經寫點／了件本者在當寺之經藏　馴空
正平六歳（一三五一）辛卯十二月十七日切句差声朱點是也／寫本之由來等委記上巻奥畢　存覺
（以上、すべて墨筆。）

右の奥書から、存覺は、正平六年（一三五一）十一月末～同十二月十七日にかけて、「觀無量壽經」「阿弥陀經」「無量壽經」の順に、「聲并句」を移点したことが知られる。

「觀無量壽經」「阿弥陀經」は、「上人御自筆本」（親鸞自筆本）の「聲并句」を写した。[3]

一方、「無量壽經」は、上巻奥書によれば、親鸞の父有範の中陰供養に際し、兼有律師（親鸞の弟）が加点したものを「本」とする。題（外題）は、「上人御筆」（親鸞自筆）であった。

親鸞が外題を記した他の写本の状況から見て、「無量壽經」の声点ならびに句切点も、親鸞自筆本の訓点を移点させた後、親鸞自ら点検・補訂していた可能性が高い。

ただし、存覺移点の底本は、その後、文永二年（一二六五）に「八條聖人御本」に基づく「點校等」、文永十二年（一二七五）に「顕御本」をもって「移點」、同年同月「校合」、嘉禎二年（一二三六）に「真如寺殿御本」から「移點」、翌年、「肥州本」によって「校點」を経ていることが、下巻奥書から知られる。

さらに、正平六歳（一三五一）の「切句差声朱點」移点に先立つ貞和四歳（一三四八）に、存覺自身によって、「以興國寺本見合加點」がなされている。本行左に見られる、本文校合のことであろう。欄外や紙背にも、「興云」に続く、墨書書き入れが存する。[4]

二、正平六年写本朱点と親鸞加点本朱点との比較
―『觀無量壽經』・『阿弥陀經』について―

正平本『淨土三部經』の奥書に依れば、正平本『觀無量壽經』『阿弥陀經』は、親鸞自筆本によって、「差聲切句」が成された訓点本である。[5]

その移点原本である親鸞自筆本が、幸い、西本願寺に現存する。一九七三年に『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）に収められ、一九八〇年に同朋舎出版から、巻子装のカラー複製が出ている。

さらに、二〇〇六年の『増補 親鸞聖人眞蹟集成』（法蔵館）でも、本資料は、朱点が判読できる二色刷りで出版された。

今、右の複製本に依り、親鸞自筆加点の朱声点・朱句切り点と、正平本に存覺によって移点されたそれらとを比較してみる（本文破損箇所は、[　]とし、破損のため声点不明の場合は、(?)とする）。

まず、両本『觀無量壽經』巻頭の数行における本文と朱点とを掲げる。なお、正平本の本文は、親鸞自筆本とは異なる本に依っており、親鸞書写加点本からの移点の際、親鸞書写本の本文を、「御本――」として、朱筆で注している。

親1　『佛(入濁色)説(入色)無(去)量(平)壽(平濁)觀(平)經一(入短)卷(平)
　　宋元嘉中畺良耶舍譯

正1　佛説觀無量壽(佛唐本)經○
　　『佛(入濁色)説(入色)無(去)量(平)壽(平濁)觀(平)經一(入短)卷(平)(朱筆)「御本此題也」　宋元嘉中畺良耶舍譯

親2　『如(去)是(平濁)我(平濁)聞(去)・一(入色)時(上濁)佛(入濁色)在(?)・王(去)舍(平)
　　城(?)・耆(去濁)闍(上)「　　」中(上濁)・與(平)

正2　『如(去)是(平濁)我(平濁)聞(去)・一(入色)時(上濁)佛(入濁色)在(平濁)・王(去)舍(平)
　　城(上濁)・耆(去濁)闍(上)崛(入色)山(上)中(上濁)・與(平)

親3　『大(平濁)比(平濁)丘(上)衆(平)・千(上)二(平)百(入短)五(?)十(入濁短)人(上)俱(上濁)・菩(去濁)薩(入色)三(去)万(平)二(平)千(上)・

正3　『大(平濁)比(平濁)丘(上)衆(平)・千(上)二(平)百(入短)五(平濁)十(入濁短)人(上)俱(上濁)・菩(去濁)薩(入色)三(去)万(平)二(平)千(上)・

親4　『文(去)殊(上濁)師(上)利(平)法(入緩)王(平)子(平濁)・而(去)為(?)上(平濁)首(平)
・爾(平)時(上濁)王(去)舍(?)大城(去濁)・
正4 5　『文(去)殊(上濁)師(上)利(平)法(入緩)王(平)子(平濁)・而(去)為(上)上(平濁)首(平)
・『爾(平)時(上濁)王(去)舍(平)大城(去濁)・
（朱筆）「御本被書續前行而被鉤別行」
親5　『有(平)一(入急)太(平)子(平)・名(去)阿(平)闍(上濁)世(平)・隨(去濁)順(平濁)調(去濁)
達(入濁急)・惡(入緩)友(上)之(上)教(平)・收(平)
正6　有(平)一(入急)太(平)子(平)・名(去)阿(平)闍(上濁)世(平)・隨(去濁)順(平濁)調(去濁)
『達(入濁急)・惡(入緩)友(上)之(上)教(平)・收(平)
親6　『執(入緩)父(平濁)王(去)・頻(去濁)婆(上濁)娑(上)羅(上)・幽(去)閉(平)置(去)於(上)
・七(入急)重(上濁)室(入緩急)内・制(去)諸(上)
正7　執(入緩)父(平濁)王(去)・頻(去濁)婆(上濁)娑(上)羅(上)・幽(去)閉(平)置(去)於(上)
・『七(入急)重(上濁)室(入緩急)内・制(去)諸(上)
親7　『群(去濁)臣(上濁)・一(入急)不(上)得(入緩)往(平)・國(入緩)大(平濁)夫(上濁)人(上)
・名　韋(上)提(上濁)希(上)・恭(去)敬(平濁)大
正8　群(去濁)臣(上濁)・一(入急)不(上)得(入緩)往(平)・國(入緩)大(平濁)夫(上濁)人(上)
・名『韋(上)提(上濁)希(上)・恭(去)敬(平濁)大
親8　『王(?)・澡(平)浴(入緩)清(去)淨(平濁)・以(?)蘇(?)蜜(入急)和(去)［　］用(平)
塗(上濁)其(去濁)身(上)・諸(?)瓔(上)珞(入緩)
正9　王(去)・澡(平)浴(入緩)清(去)淨(平濁)・以(平)蘇(上)蜜(入急)和(去)麨(上)・用(平)
『塗(上濁)其(去濁)身(上)・諸(去)瓔(上)珞(入緩)
親9　『中(上)・盛(去濁)葡(上)桃(上濁)漿(上)・蜜(入急)以(平)上(平濁)王(?)・爾時
大王・食(入濁緩)麨(去)飲(平)漿(去)・

正10　中(上)・盛(去濁)葡(上)桃(上濁)漿(上)・蜜(入急)以(平)上(平濁)王(去)・爾時
『大王・食(入濁緩)麨(去)飲(平)漿(去)・
親10　『求(去濁)水(上)漱(ソク反)(入急)(シユ反)(平)口(平)・漱［　］已(平)・合(?)掌(平)恭(上)
敬・向(平)耆(上濁)闍(上)崛山・
正11　求(去濁)水(シキ反)(上)漱(ソク反)(入急)(シユ反)(平)口(平)・漱口畢(入急)已(平)・合(入濁急)掌(平)恭(上)
『敬・向(平)耆(上濁)闍(上)崛山・

右の如く、この範囲での両本加点は、加点の有無を含め、句切り点まで、完全に一致している。

これによって、奥書に見られる通り、正平本の朱点は、親鸞加点本から移点されたものであり、その移点は、極めて正確であることが知られる。親鸞加点本が破損のため判読できない箇所にも、正平本と同一の加点が存した可能性が高いであろう。

右箇所以降の全体を通じて、両本の朱点を同様に比較し、両者異なる点を左に掲げる。（算用数字は、親鸞自筆本における通し行数である。なお、以下では、一本の対応箇所が虫損等で不明の例は、対象外とした。）

【親鸞自筆本に訓点が多い例】

(所在)　〈仮名音注〉	〈声点〉	〈仮名音注〉	〈声点〉
観12　如(去)鷹(オウ反)(上)準(シユン反)(平濁)飛(平)		如(去)鷹(上)準(平濁)飛(平)	
観104　名爲粗(シヨウ反)(去)見・		名爲粗(去)見・	
観104　極(入濁緩)樂(入急)國地・		極樂(入急)國地・	

［親鸞自筆本］　［正平本］

観113	頗(去)梨(平)色(入)中・	頗梨色(入)中・
観136	无常(上)无(平)我・	无常(上)无我・
観194	其(去)光(上)金色(入)・	其光(上)金色(入)・
観211 231	以爲侍(平)者(平)・	以爲侍(平)者・
観88	皆令(平)明(去)了(平)	皆令明(去)了(平)
観221	自然當(去)見(平)・	自然當(去)見・
観223	諸佛現前(去)受(平)記(平)・	諸佛現前受(平)記(平)・
観234	眉間毫(去)相・	眉間毫相・
観260	當地動(平)處・	當地動處・
観284	常來(平)至此・	常來至此・
観288	有憶(入)想(平)者・	有憶(入)想(平)者・
観295	名第十三(平)觀(平)	名第十三觀
観302	具(平)此功德・	具此功德・
観305	觀(去)世音菩薩・	觀世音菩薩・
観307	照行者(平)身(平)・	照行者(平)身・
観401	經歷多(平)劫・	經歷多劫・
阿18	極樂(入)國土・	極樂國土・
阿18	八功(平)德水(上)・	八功德水(上)・
阿23	成(去)就(平)如是・	成就如是・
阿33	七(入)菩提分・	七菩提分・
阿37	何(去)況(平)有實・	何況(平)有實・
阿44	无所鄣(平)閡(平)・	无所鄣閡(平)・
阿46	阿(去)僧(上)祇(上)劫(入)・	阿僧(上)祇(上)劫(入)・
阿47	於今(平)十(入)劫・	於今十(入)劫・
阿48	非是算(平)數(平)・	非是算數(平)・
阿49	之(去)所能(去)知(上)・	之所能(去)知(上)・
阿51	其中(上)多(去)有・	其中(上)多有・
阿57	聞(去)說(入)阿彌陀佛・	聞說阿彌陀佛・
阿62	故說此言(平)・	故說此言・
阿63	應(去)當(上)發願・	應當(上)發願・
阿69	所護(平)念經(上)・	所護念經(上)・
阿80	最(去)勝(平)音(上)佛・	最(去)勝音(上)佛・
阿90	上方(去)世界・	上方世界・
阿97	於(去)汝意云(去)何(上)・	於汝意云(去)何(上)・
阿97	何(去)故名(去)爲(上)・	何故名(去)爲(上)・
阿103	是諸(上)人(上)等・	是諸人(上)等・
阿110	能於(平)娑(去)婆(上)國土・	能於娑(去)婆(上)國土・
阿111	劫(入)濁(入)・	劫(入)濁・
〈句切り点〉		
観89	名曰初(去)觀(平)・一	名曰初(去)觀(平)
観212	一一好・一	一一好
観242	以此寶手・一	以此寶手
観242	接(入)引(平)衆生・一	接(入)引(平)衆生
阿51	阿(平)鞞(平)跋(入)致(上)・一	阿(平)鞞(平)跋(入)致(上)
阿110	能爲(上)甚(去)難(平)・一	能爲(上)甚(去)難(平)

【正平本に訓点が多い例】

（無し）

右が、両本朱点に見られる相違点のすべてである。

右以外の朱点は、両本完全に一致することから、正平本奥書の「上人御自筆本」は現存西本願寺蔵親鸞自筆本である、と見て間違いないであろう。[6]

右両本の相違点は、すべて、親鸞自筆本に存する訓点が、正平本には無いものである。

正平本には、親鸞自筆本には見られない、次のような書き込みが有る。

観 134　十二(平)由(上)旬(平濁)平声任御本／不定・

観 162　遍(平)覆(平濁)(入濁)〔〈下欄〉私云覆字有平濁入清二声〕地上・

右例から、声点・声調に関する十分な知識が、存覚に存したことがうかがえる。そのため、先の異同には、存覚が意図的に移点しなかったものを含む可能性を、否定できない。

よって、これらは、存覚が移点を省略した、あるいは、移点し落としたために生じた相違点である、と考えられる。

しかし、存覚が私意によって訓点を増補したと考えられる例は、皆無である。

三、正平六年写本朱点と龍谷大学本南北朝期朱点との比較

―『無量壽經』について―

次に、正平本『無量壽經』の朱点を、兼有律師加点『無量壽經』または親鸞自筆加点『無量壽經』の訓点と比較したい。

ところが、この両本とも、現在に伝わらないらしい。

しかし、幸い、親鸞加点本の声点・句切り点を移点したと推測される『無量壽經』訓点が伝存する。龍谷大学蔵『無量壽經』(021-129-2)南北朝期朱点である。[7]

左に、『無量壽經』巻上巻頭部分を、先と同様に比較引用することで、龍谷大学蔵『無量壽經』南北朝期朱点と正平本『無量壽經』朱点との異同を示す。（龍谷大学蔵本南北朝期朱点を龍、正平本朱点を正とする。算用数字は、各本における行数である。）

龍 1 2『佛　説(入濁)無(去)量(平)壽　經(上)卷(平)上

『　曹魏天竺三藏康僧鎧譯

正 1　『佛(入濁)説(入濁)無(去)量(平)壽(平濁)經(上)卷(平)上(平濁)

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

龍 3　『我(平濁)聞(去)如(上)是(平濁)・一(入濁)時(上濁)佛・住(平濁)王(去)舍(平)城(上濁)・耆(去濁)闍(上)崛(入濁)山(上)中(上濁)・與(平)

正 2　『我(平濁)聞(去)如(上)是(平濁)・一(入濁)時(上濁)佛・住(平濁)王(去)舍(平)城(上濁)・耆(去濁)闍(上)崛(入濁)山(上)中(上濁)・與(平)

龍 4　『大(平濁)比(平濁)丘(上)衆(平)万(平)二(平)千(上)人(上)俱(上濁)・一切(平濁)大聖(平)神通(上濁)已(平)達(入濁)・

正 3　『大(平濁)比(平濁)丘(上)衆(平)万(平)二(平)千(上)人(上)俱(上濁)・一切(平濁)大聖(平)神通(上濁)已(平)達(入濁)・

龍 5　『其(去濁)名(上)曰(入濁)・尊(去)者(平濁)了(平)本(平)際(平濁)・尊者正(平)願(平濁)・尊者正語(平濁)・尊

正 4　『其(去濁)名(上)曰(入濁)・尊(去)者(平濁)了(平)本(平)際(平濁)・尊者正(平)願(平濁)・尊者正語(平濁)・尊

龍 6　『者大(平濁)号(平濁)・尊者仁(去)賢(上濁)・尊者離(去)垢(平)・尊者名(去)聞(上)・尊者

正 5　『者大(平濁)号(平濁)・尊者仁(去)賢(上濁)・尊者離(去)垢(平)・尊者名(去)

聞(上)・尊者

龍7　『善(平濁)實(入濁急)・尊者具(平濁)足(入緩)尊者牛(去濁)王(上)・尊者優(上)
　　樓(上)頻(上濁)蠡(上)迦(上)

正6　『善(平濁)實(入濁急)・尊者具(平濁)足(入緩)尊者牛(去濁)王(上)・尊者優(上)
　　樓(上)頻(上濁)蠡(上)迦(上)

龍8　『葉(入緩)尊者伽　耶(上)迦葉・尊者那(去)提　迦葉・尊者摩(平)
　　訶(上)

正7　『葉(入緩)尊者伽(去濁)耶(上)迦葉・尊者那(去)提(上濁)迦葉・尊者摩(平)
　　訶(上)

龍9　『迦葉・尊者舍(平)利(平)弗(入急)・尊者大目(入急)揵(去)連(上)・尊
　　者劫(入急)賓(去)

正8　『迦葉・尊者舍(平)利(平)弗(入急)・尊者大目(入急)揵(去)連(上)・尊
　　者劫(入急)賓(去)

龍10　『那(上)・尊者大住・尊者大(平濁)淨(平濁)志(上)・尊者摩訶周(上)
　　那(上)・尊

正9　『那(上)・尊者大住・尊者大(平濁)淨(平濁)志(上)・尊者摩訶周(上)
　　那(上)・尊

右のとおり、両点は、偶然では起こり難い一致を見せる。[8]

左に、続けて、両本朱点を対照させる。

龍谷大学蔵本巻上11行目以降における両本朱点の相違点は、以下がそのすべてである。

【龍大本に訓点が多い例】

(所在)　[龍大本]　　[正平本]

〈仮名音注〉

下192　且(去)自見之・　　且(去)自見之・

〈声点〉

上17　光英(平)(上)　　光英(上)

上128　无(去)明欲(入緩)怒(上)　　无明欲(入緩)怒(上)

上58　超(去)越(入急)聲(去)聞(上)　　超(去)越(入急)聲(去)聞

上293　第三(上)法(入濁緩)忍・　　第三法(入濁緩)忍・

下63　深(去濁)廣(平)無(去)崖(上濁)底(上)　　深廣(平)無(去)崖底(上)

下130　如優(上)曇(上濁)鉢(入濁急)華(上)　　如優(上)曇鉢華(上)

下45　微(去)妙難思(上)議(上濁)　　微妙難(去)思(上)議(上濁)

下63　唯佛獨(入濁緩)明(去)了　　唯佛獨明(去)了

下179　有所恚(去)怒(上)・　　有所恚怒(上)・

〈句切り点〉

上39　六種震動(平濁)・|　　六種震動(平濁)

下26　諸天人民(上)・|　　諸天人民(上)

下28　菩提之心(上)・|　　菩提之心(上)

下167　尊(去)貴(平)豪(去)富(平)・|　　尊(去)貴(平)豪(去)富(平)

下259　最(去)无(上)倫(平)匹(入急)・|　　最(去)无(上)倫(平)匹(入急)

下453　无等无倫(平)・|　　无等无倫(平)

【正平本に訓点が多い例】

（所在）［龍大本］

〈仮名音注〉

上26 博(入緩)綜(上)道(平濁)術(入濁急)
上27 遊(去)於(上)後(去)園(平)
上28 服(入濁緩)乘白(入緩)馬(上濁)
上42 洗(平)濯(入緩)垢(平)汚(平)
上43 貯(平)功徳
上44 現欣(平濁)咲(平)(去)
上71 杜(平)三(去)趣(平濁)
上91 猶(去)靈(平)(上)瑞(平濁)華(上)
上94 无能遏(入急)絶(入濁急)
上108 次名水(去)光
上114 次名善宿(平)
上126 威徳无侶(上)
上231 嚴(去濁)淨(平濁)光(去)麗(上)・
上343 光赫(入緩)焜(平)耀(去)
上348 春(平)秋(上)冬(去)夏(上濁)
上395 如大海水(上)・
上456 水(去)輒(入緩)還(去濁)復(入緩)・
上485 人(去)理(平)殆(平)盡(平濁)・
上488 於己(平)无(去)益(入急)・

［正平本］

博(入緩)綜(上)道(平濁)術(入濁急)
遊(去)於(上)後(去)園(平)
服(入濁緩)乘(去濁)白(入緩)馬(上濁)
洗(平)濯(入緩)垢(平)汚(平)
貯(平)功徳
現欣(平濁)咲(平)(去)
杜(平)三(去)趣(平濁)
猶(去)靈(平)(上)瑞(平濁)華(上)
无能遏(入急)絶(入濁急)
次名水(去)光
次名善宿(平)
威徳无侶(上)
嚴(去濁)淨(平濁)光(去)麗(上)・
光赫(入緩)焜(平)耀(去)
春(平)秋(上)冬(去)夏(上濁)
如大海水(上)・
水(去)輒(入緩)還(去濁)復(入緩)・
人(去)理(平)殆(平)盡(平濁)・
於己(平)无(去)益(入急)・

上489 徒(去)爲(上)他(去)有・
上489 无善可怙(平)・
上489 无徳可恃(平濁)・
上492 履(去)信(平)修(上)善・
上494 享(平)茲(上濁)福(入緩)樂(入緩)・
下152 著(去)於(上)无上下・
下171 便(去濁)復(平濁)糜(去)散(平)・
下190 安(平)所(平)須(去)待(上濁)・
下268 迭相呑(去濁)噬(上濁)・
下270 乞(入急)匂(去濁)孤(去)獨(入濁緩)
下219 愛欲榮(平)華(平濁)・
下351 徙(去)倚懈(平濁)惰(平濁)・
下420 以善改〔〈上欄〉攻〕惡・
下388 罪惡所招(去)・

〈声点〉

上19 制行(平濁)菩薩
上22 處(平)兜率(入急)天(上)
上28 見(平)老(平)病(平濁)死
上34 奮(平)大光(去)明(上)
上55 以甚(平濁)深(去濁)禪慧
上65 分別(入濁急)顯示
上72 愛(平)敬(平)父(平濁)母
上98 願樂(平濁)欲聞
上105 次名瑠璃(上)妙華

徒(去)爲(上)他(去)有・
无善可怙(平)・
无徳可恃(平濁)・
履(去)信(平)修(上)善・
享(平)茲(上濁)福(入緩)樂(入緩)・
著(去)於(上)无上下・
便(去濁)復(平濁)糜(去)散(平)・
安(平)所(平)須(去)待(上濁)・
遞〔上欄〕迭本相呑(去濁)噬(上濁)・
乞(入急)匂(去濁)孤(去)獨(入濁緩)・
愛欲榮(平)華(平濁)・
徙(去)倚懈(平濁)惰(平濁)・
以善改〔〈上欄〉攻〕惡・
罪惡所招(去)・

制(去)行(平濁)菩薩
處(平)兜(平)率(入急)天(上)
見(平)老(平)病(平濁)死(平)
奮(平)大(平濁)光(去)明(上)
以甚(平濁)深(去濁)禪(去濁)慧
分(去)別(入濁急)顯示
愛(平)敬(平)父(平濁)母(平)
願(平濁)樂(平濁)欲聞
次名瑠(去)璃(上)妙華

上117 等正覺(入濁緩)明行足
上121 高(去)才勇(去)哲(入急)
上146 懃(平濁)苦(平)之本
上168 餓鬼畜生者
上169 175 國中人天
上187 不取正覺
上200 不善名者
上226 不如意者不取正覺
上257 厭(平)惡(入緩)女身・
上272 覩(平)其面(平)像
上293 第一第二・
上297 我建超(去)世(平)願
上314 一向(平)專志(上)
上321 恭敬(平濁)三(去)寶(平濁)・
上329 豪(去)姓(平)尊(去)貴
上332 其香普薰(去)
上342 轉(平)相(平濁)入間(去)
上365 身意柔軟・
上371 日夜稱(去)說・
上379 都(去)共(平濁)集會(平)
上445 清淨香潔
上417 實實相當(平)・
上521 白(入濁緩)色白(入濁急)光・
上522 明曜日月・
下7 至心(去)迴向・

等[平]正[平]覺(入濁緩)明行足
高(去)才[平]勇(去)哲(入急)
平本定
懃(平濁)苦(平)之本[平]
餓鬼畜生(チウ反)者[平]
國中人天[上濁]
不取[平]・正覺
不善名[上濁]者
不[上]如[上]意[平]者不取正覺
厭(平)惡(入緩)女身[去]・
覩(平)其[上濁]面(平)像[平濁]
第[平濁]一第[平濁]二・
我建[平]超(去)世(平)願
一向(平)專[去]志(上)
恭[去]敬(平濁)三(去)寶(平濁)・
豪(去)姓(平)尊(去)貴[平]
其香[上]普薰(去)
轉(平)相(平濁)入(去)間(去)
去声本定
身[去]意柔軟・
日夜稱(去)說[入急]・
都(去)共(平濁)集[入緩]會(平)
清淨香潔[入急]
實[入濁急]實相當(平)・
白(入濁緩)色白(入濁急)光[去]・
明曜[上]日月・
至心(去)迴[上]向・

下39 往覲无量覺
下46 應(去)時(上濁)无量尊
下47 動(平濁)容(去)發欣(平濁)咲(去)
下48 踊躍皆歡(上)喜
下50 整服(入濁緩)稽首問(平)
下53 志(去)求嚴淨土
下61 通(去)達諸法(入急)性
下62 難(去)以信此(平)法
下68 譬如(上)從生(上)盲(平)
下68 必過要(平)聞(去)法
下70 廣濟生死流(上)
下87 以弘(上濁)誓(平濁)功德
下116 光色昱(キフヤク)爍(イクシヤク)・
下130 生身(上濁)煩惱
下138 希有難(去)遇故・
下145 拔諸欲刺(上)・
下151 所共(平濁)稱嘆(平濁)・
下181 不可稱(去)說
下185 然(去)含毒畜(入緩)怒(上)・
下187 遠(平)到(平)他所・
下190 道路不同(上濁)・
下199 欲何(上濁)樂(入緩)哉・
下202 教語開導・
貪(去)狼(上)於財(去濁)色・

往覲[平濁]无量覺
應(去)時(上濁)无[去]量尊
動(平濁)容(去)發欣(平濁)咲(去)[平]
踊躍[入急]皆歡(上)喜
整[平]服(入濁緩)稽首問(平)
志(去)求(上濁)嚴(去濁)淨土
通(去)達諸法[入緩]性
難(去)以信此(平)法[入緩]
譬如(上)從(去濁)生(上)盲(平)
必過要(平)聞(去)法[入濁緩]
廣濟[平]生死流(上)
以弘(上濁)[入去]誓(平濁)功德
光色昱[入緩](キフヤク)爍[入緩](イクシヤク)・
生[去]身(上濁)煩惱
希有難(去)遇[上濁]故・
拔[入濁急]諸欲刺(上)・
所共(平濁)稱[去]歎(平濁)・
不可稱(去)說[入急]
然(去)含毒[入濁緩]畜(入緩)怒(上)・
遠(平)[去]到(平)他所・
道路[上]不同(上濁)・
欲何(上濁)樂(入緩)哉[去]
教語開[去]導・
貪(去)狼(上)於[上]財(去濁)色・

下211 貧(去濁)富貴賤・
下293 臣(平)欺(上濁)其(去濁)君・
下322 恐(平)熱迫憎・
上332 其香普熏(去)・
下334 朋友(上)无信・
下338 天神記識・
下368 會當(去)歸(上)死・
下377 難可具盡・
下452 以疑惑心・
下412 飲苦食毒・
下455 修習(入緩)善本・
下502 名曰无上華・
下503 已曾供養・
下466 不知菩薩
下456 常不見佛・

〈句切り点〉

上47 普現道教(平)
上82 今日世英(ヤウ)(平)(去)
上117 爾時次有佛
上117 名世自在王
上117 如來應供(平濁)
上159 具足五(去濁)劫(入緩)
上187 不取正覺
上189 必至(平)滅度者(平)

貧(去濁)富(平)貴賤・
臣(平)欺(上濁)其(去濁)君(上濁)・
恐(平)勢(平)[〈上欄〉熱本]迫憎・
其香(上)普熏(去)・
朋(平)友(上)无信・
天(去)神記識・
會當(去)(上濁)歸(上)死・
難(去)可具盡・
以疑(上濁)惑心・
飲(平)苦食毒・
修習(入緩)善本(平濁)・
名曰无上華(上)・
已曾(去濁)供養・
不知(上)菩薩
常不(上)見佛・

普現道教(平)・|
今日世英(ヤウ)(平)(去)・|
爾時次有佛・|
名世自在王(去)・|
如(去)來應(去)供(平濁)・|
具足五(去濁)劫(入緩)・|
不取(平)・正覺
必至(平)滅度者(平)・|

上213 不悉成滿(上)
上216 一(入急)生(去)補(平)處(平)
上226 諸(去)所欲求
上226 供養之具
上226 若不如意者不取正覺
上231 一切万(平)物(入急)
上263 莫不(上)致(去)敬(平)
上268 所受快(平)樂(入緩)
上332 出栴(去)檀(上濁)香(上)
上335 超諸天(去)人(上)
上379 都(去)共(平濁)集會(平)
上387 那由他劫(入緩)
上460 或聞佛聲
上474 但見(平)色(入緩)聞(去)香(上)
上475 无所味着
上483 无以爲(上)喩(平)
下129 如梵(平濁)天(去濁)王(上)
下176 父(平濁)(上)子(平)(上)兄(去)弟(ティ)(平)
下192 都(去)不信之(上)
下236 天下久(平)久(平)
下259 甚爲(上)至德
下262 爲(去)最(上)劇(入急)苦(平)
下354 衆(平)共患(平濁)厭(平)
下388 示衆(平)見之(上)
下410 爲善者多(上)

不悉成滿(上)・|
一(入急)生(去)補(平)處(平)・|
諸(去)所欲求・|
供養之具・|
若不(上)如(上)意(平)者不取正覺・|
一切万(平)物(入急)・|
莫不(上)致(去)敬(平)・|
所受快(平)樂(入緩)・|
出栴(去)檀(上濁)香(上)・|
超諸天(去)人(上)・|
都(去)共(平濁)集(入緩)會(平)・|
那由他劫(入緩)・|
或聞佛聲・|
但見(平)色(入緩)聞(去)香(上)・|
无所味着・|
无以爲(上)喩(平)・|
如梵(平濁)天(去濁)王(上)・|
父(平濁)(上)子(平)(上)兄(去)弟(ティ)(平)・|
都(去)不信之(上)・|
天下久(平)久(平)・|
甚爲(上)至德・|
爲(去)最(上)劇(入急)苦(平)・|
衆(平)共患(平濁)厭(平)・|
示衆(平)見之(上)・|
爲善者多(上)・|

下452 不了佛智・
下465 不(上)聞(上)經法(入濁緩)
下484 有六十七億

【加点位置の異同】

(所在) 【龍大本】

上205 若不生(上)・者(平濁)
下526 得(入急)聞亦難(平)・
下42 咸(去濁)然(上濁)奏(平)天樂(入濁緩)
下210 悟之者寡(クワ)(平濁)
下355 貧窮困(去)乏(ホフ)(入濁緩)・
下355 辜較(ハク)(入緩)縱(上濁)奪(入濁緩)・
下356 串(クヮン)(平濁)數(平)唐得・

【正平本】

不了・佛智・
不(上)聞(上)經法(入濁緩)・
有六十七億・

若不生(上)者(平濁)・
得聞(去)亦難(平)・
咸(去濁)然(上濁)奏天(上)樂(入濁緩)
悟之者寡(クワ反)(平濁)
貧窮困(去)乏(ホフ)(入濁緩)・
辜(平)較(ハク)(入緩)縱(上濁)奪(入濁緩)・
串(クヮン)(平濁)數(平)唐(平)得・

【加点内容の異同】

上517 陷(ケム)(平)下四寸(シュン)(平)(去)
下201 各欲(入急)快(平)意・

陷(ケム)(平)下四寸(シュン)(平)(去)
各欲(入急)快(平)意・

以上、この両本の比較では、ともに異同が存する。

しかし、右に見られる通り、下段「正平本」の方に、全体的に加点が多い。

四、正平本・龍谷大学本『無量壽經』と親鸞加点本

右の如く、仮名音注・声点・句切り点が多い例は、正平本に偏る。

先の、親鸞自筆『觀無量壽經』『阿弥陀經』との比較から、存覺は、親鸞自筆本に仮名音注・朱声点・句切り点を追加しないことが確認された。

『觀無量壽經』『阿弥陀經』に続けて移点した『無量壽經』も、底本の訓点以外に追加しないという移点態度を、存覺は、おそらく変更しなかったであろう。

そうであるならば、存覺の『無量壽經』移点底本に、現正平本の音注が、すでに存したことになる。

正平本には、次のような、龍大本には存しない、本文異同や加点内容に関する私注、あるいは訓注・義注が有る。

(所在) 【龍谷大学蔵本】

下2 曹魏天竺三藏康僧鎧譯
下437 明耀(上)顯(平)赫(入緩)・
下211 无可聊(平)賴(上)(去)・
上360 或照一由(上)旬(平濁)
上403 白(入濁急)銀(去)爲莖(上)
上429 舌(入濁急)嘗(去)其(上濁)味(平)
上472 珊瑚虎(上)魄(入緩)・
上488 於己(平)无(去)益(入急)・
下93 班
下134 不忘(平)勝(平)故・
下317 但念婚(去)姺(入急)・
下366 所(平)(平濁)從(上濁)來(上)・

【正平本】

曹魏康僧鎧譯 本无譯者
明曜(上)顯(平)赫(入緩)・ 耀本
无可慘(平)[(上欄)聊(平)(去)本]賴(上)(去)・
或照一由(上)旬(平濁) 平本定
白(入濁急)銀(去)爲莖(上) 二字声本定
舌(入濁急)嘗(去)其(上濁)味(平) 清本定
珊瑚虎(上)魄(入緩)・ 去声本定
於己(コ)(平)无(去)益(入急)・ 急声本定
班本比字也 (ハン)(ヘン)
不忘(平)勝(平)故・ 忌(キ反)本
但念婚(去)姺(入急)・ 清濁両声本定 逸反
所(平)(平濁)從(上濁)來(上)・

上79　影(平)暢(去濁)表(上)裏(上)
上90　光闡(平)(入上)道教
上97　究暢(平濁)(去濁)无極
上119　尋(去濁)發无上
上140　幸(平)佛信(平)明(去)
上303　日月戢(入様)重(平濁)輝(上)
下160　憂思(上)適(入様)等・
下222　虧(平)負(平濁)經(去)戒(平)・
下392　无所省(平)録(入様)・

影(平)暢(去濁)表(上)裏(上)
トデルカ
光闡(平)(入上)道教
ヒロク
究暢(平濁)(去濁)无極
ヒロメ
スナハチ
尋(去濁)發无上
ネカハクハ
幸(平)佛信(平)明(去)
日月戢(入様)重(平濁)輝(上)
シフ
ヤヤメ
憂思(上)適(入様)等・
乃也
虧(平)負(平濁)經(去)戒(平)・
違也
无所省(平)録(入様)・
察也

これらは、親鸞自筆『観無量壽經』『阿弥陀經』には存しない類の注である。

存覚が底本とした『無量壽經』訓点本に、「八條聖人御本」「顕御本」「真如寺殿御本」「肥州本」などから移点されていたものであろう。

これらの点から、正平本の底本は、親鸞加点の仮名音注・声点・句切り点を移点した後、増補が加えられたものであった、と考えられる。[9]

したがって、龍谷大学本『無量壽經』は、正平本よりも、親鸞自筆『観無量壽經』『阿弥陀經』の加点実態に近い。

おそらく、現存龍谷大学本『無量壽經』朱点は、親鸞自筆『無量壽經』字音点(またはその移点本)を、正確に移点したものであろう。

以上の検討は、親鸞加点『無量壽經』が現存しないため、不明の部分が多い。また、龍谷大学蔵『無量壽經』と同時に加点された『観無量壽經』『阿弥陀經』が伝わらないらしく、親鸞自筆『観無量壽經』『阿弥陀經』訓点との比較ができないことも、残念である。

しかし、正平本・龍大本とも、親鸞加点の字音点を反映することが確認された。

五、結び

以上、正平本『淨土三部經』は、正平六年(一三五一)における親鸞自筆訓点本およびその移点本からの、正確な移点本である。

これが判明したことによって、本資料は、日本語史上、以下の価値を持つ。

1．親鸞自筆本の欠を補うことが可能となった。

現存親鸞自筆『観無量壽經』『阿弥陀經』は、良好な保存状態ではあるが、経年による痛み・虫損は免れていない。

声点図の欠けた部分や、欠損した文字・声点を、正平本の記述・加点によって補うことができる。[10]

2．龍谷大学蔵『無量壽經』の声点をも、親鸞自筆本の正確な移点本と判断することが可能となった。

親鸞自筆『無量壽經』字音点の伝本は、現在、確認されていない。

本稿の対象とした存覚書写正平本は、親鸞自筆『無量壽經』の字音点を伝えると考えられる。しかし、これは公開されてい

ない。(1)

その存覺書写正平本朱点との比較によって、龍谷大学蔵『無量壽經』南北朝期朱点が、親鸞自筆『無量壽經』字音点を正確に移点したものであることが推定された。

この龍谷大学蔵『無量壽經』南北朝期点は、全頁カラー写真がインターネット上に公開されている。また、所定の手続きを取れば、原本の閲覧も可能である。

鎌倉時代極初期の呉音直読資料で、その全貌が公開されているものは、少ない。龍谷大学蔵『無量壽經』上下二巻二冊(021-129-2)を活用することによって、より詳細な日本漢字音史が描かれることが期待される。

注

(1) 当時のセンター長故浅井成海先生・本願寺教学伝道研究所長満井秀城先生・お世話下さった三栗章夫先生はじめセンターの皆様に、改めて御礼申しあげます。

(2) 原本閲覧の機会が得られていないため、書誌等は、『古写古版真宗聖教現存目録』(一九三七年、本願寺宗学院)に依られたい。

(3) なお、「日來所奉寫持之本先年於關東紛失」とされる本は、現在、三重県津市の真宗高田派本山専修寺に伝わっている、存覺二十九歳時の写本『觀阿弥陀經』である、と考えられている。小川貫弌「「觀阿弥陀經集註」について」、川瀬和敬「高田山所蔵存覺手写本『觀阿弥陀經集註』について」(ともに、『定本親鸞聖人全集　別冊　研究ノート』(一九七〇年、法蔵館)所収)、平松令三編『高田本山の法義と歴史』(一九九一年、同朋舎出版)八八頁、参照。この本についても、原本閲覧の機会が得られることを願っている。

(4) これには、『切韻』『玉篇』などからの引用が含まれ、貴重である。ただし、朱筆字音点を対象とする本稿では、これらに触れない。

(5) ただし、經本文は、別本に依る。この本文の異同について、正平本に、「御本此字也」「御本有此字」「有本作光明／御本如此被載上」などの存覺筆注が書き込まれている。他本によって写した本文に、親鸞筆「御本」の訓点を加点した際、「御本」の本文との異同を記したものである。

(6) また、このことから、西本願寺蔵親鸞自筆『觀經・阿弥陀經集註』の訓点が、伝承の通り、親鸞自筆であることが再確認される。

平松令三編『高田本山の法義と歴史』八八頁の専修寺蔵文保元年(一三一七)存覺写「親鸞聖人觀阿弥陀經集註」の解説には、次の記述が有る。

実は西本願寺の原本は発見当時、それが聖人の真蹟であるかどうかの議論があり、聖人吉水時代の作品として国宝に指定されたものの、一抹の不安が残されていた。それがこの存覺書写本の発見によって、聖人真蹟であることを確かめることができたのであった。

(7) 佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について ―定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点―」(「鎌倉時代語研究」第十六輯、一九九三年五月)、参照。

(8) 前注論文では、龍谷大学蔵本に刊記・訓点奥書等が存しないため、龍谷大学蔵本『無量壽經』字音点が、親鸞字音点に近いことを推定するに留まっていた。

龍谷大学蔵本『無量壽經』には、上下巻とも、巻末に次の墨筆奥書のみが記されている。

覚忍禅尼被付属光助法印訖／康安元年（一三六一）　十一月十七日

龍谷大学図書館『龍谷大学図書館善本目録』（一九三六年、龍谷大学出版部）および藤堂祐範『浄土教版の研究』（一九七六年、山喜房仏書林）の解説では、この奥書は常楽臺の初代存覚上人の筆と伝えられており、そのように推測される旨を記している。これは、上下巻とも表紙見返しに、おそらくは奥書と同筆で、「常楽臺　三部四巻内」と記され、これらが存覚の字体と認められることによるのであろう。

よって、本書の訓点も、存覚によって加点された可能性が存する。

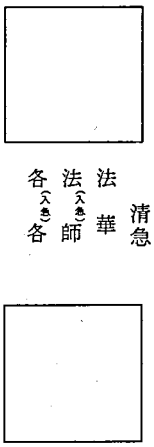
(9) 仮名音注に付された「反」の有無のみの異同は、右に掲げなかった。しかし、これも、次の通り、正平本が「反」を付す例ばかりである。

	〔龍谷大学蔵本〕	〔正平本〕
上152	一人叔(シクウ)(平)量(平)	一人叔(シクウ反)(平)量(平)
上168	餓鬼畜生者(平)・	餓鬼畜生者(平)・
上231	光(平)麗(レイ)(上)・	光(平)麗(レイ反)(上)・
下126	无染(オ)(平入上)汚(平)故・	无染(オ反)(平入上)汚(平)故・
下203	生死无翁(ワ)(上)已(イ)・	生死无翁(ワ反)(上)已(イ反)・
下207	昏(平)曚(ム)閉(平)塞(シ反)(入)・	昏(平)曚(ム反)閉(平)塞(シ反)(入)・
下210	悟之者寡(クワ)(平)	悟之者寡(クワ反)(平)
下291	任(平)用(平)臣(平)下(カ)(上)・	任(平)用(平)臣(平)下(カ反)(上)・

(10) 親鸞は、自身で、次の声点図を記し残している（『御影堂平成大修復事業記念西本願寺展』（二〇〇三年、東京国立博物館）、『増補　親鸞聖人真蹟集成　第三巻』（二〇〇七年、法蔵館）等でご確認いただきたい。その他、自筆ではないが、専修寺蔵『浄土高僧和讃』（表紙見返）にこの二つの声点図の要点を仮名書きした声点図が有る）。

①西本願寺蔵『觀無量壽經註』（巻首）　鎌倉時代極初期親鸞自筆書写

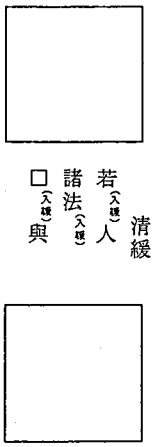
諸法



清急　法華　法(入急)師　各(入急)各

濁急　眷属(入濁急)俱(上)

是従(上濁)



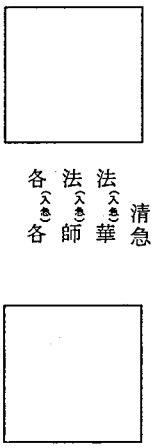
清緩　若(入緩)人　諸法(入緩)　口(入緩)與

濁緩　聽法(入濁緩)　寂(入濁緩)静　眷属(入濁緩)

朱で書かれ、具体例の声点は、墨で記されている。虫損甚だしい。

②正平本『觀無量壽經』（巻首）　正平六年（一三五一）存覚書写

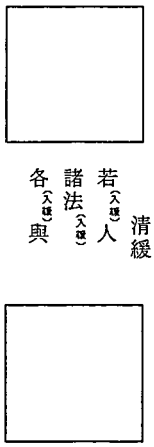
諸(平)法



清急　法(入急)華　法(入急)師　各(入急)各

濁急　眷属(入濁急)俱(上)

是従(上濁)



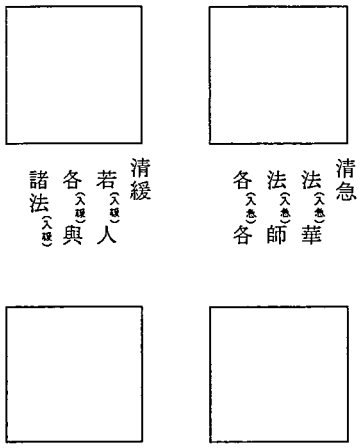
清緩　若(入緩)人　諸法(入緩)　與(入緩)各

濁緩　聽法(入濁緩)　寂(入濁緩)静　眷属(入濁緩)

この②正平本の声点図により、①西本願寺蔵『観無量壽經註』の声点図の原形が確認できた。

なお、親鸞自筆本からの存覚二十九歳時移点本である専修寺蔵『観阿弥陀經』一三一七・八年写本の巻頭にも、②の声点図と全同の声点図が写されている（平松令三編『高田本山の法義と歴史』八八頁、参照）。

③西本願寺蔵『唯信抄』（巻頭）　寛喜二年（一二三〇）親鸞書写



右①②③の声点図は、ほぼ等しい。

ただし、③西本願寺蔵『唯信抄』左上の図では、喉内入声字「若」「各」を上字とし、「清緩」の声点が加点された「若人」「各與」を先に置いている。また、左下の図では、「眷属」を最初に挙げている。これは、「濁急」の例として掲出された「眷属俱」と対応させ、比較の上、理解を促すためであろうと考えられる。この点から、③西本願寺蔵『唯信抄』の声点図は、①②『観無量壽經』の声点図と比較して、より整備されている、と見ることができる。

一方、①西本願寺蔵『観無量壽經註』声点図は、親鸞自筆であることは広く認められているものの、表紙見返に書き込まれているため、後の書き込み、後代の添付と考える余地もある。

しかし、存覚が一三一七年と一三五一年とに、この声点図をそのまま写した原本が現存するのであるから、①の声点図が、一三一七年に、現在の位置に存したことは明らかである。

また、①の声点図は、③『唯信抄』の声点図と比較して未整理であるため、一二三〇年以前に書き込まれたものと推定される。

以上を総合して、①西本願寺蔵親鸞自筆『観無量壽經註』の声点図は、同本に加点された声点の凡例に当たるものとして、親鸞によって、声点加点時に記入されたものである、と推測される。

この、復元された声点図は、声点の帰納的研究を補うものである。

(11) 一九八〇年四月十五日～五月二十五日の会期で、京都国立博物館にて、特別展覧会「西本願寺の秘宝」が開催された。その際の、京都国立博物館編の図録には、本資料「佛説観無量壽經」巻首見開きのモノクロ写真が収められている。管見の範囲では、公になった本資料写真は、この一葉のみである。

［ささき　いさむ、広島大学大学院教授］

（平成二十二年十二月八日受理）